

## 幸せの象徴「米」礼賛！ らいさん

山潟中は、周囲を田畑に囲まれている。特に、正面玄関前は道路を一本挟んで田園が悠々と構えて広がり、水入れ、代掻き、田植え、稲刈り、と続く稲作の過程で、その姿の色彩や装いを季節とともに変えていく。その様は、1年間の学校の歩みと呼応し、それに伴う子ども達の成長と、まさにシンクロしているように見てとれる。土地も人も、冬を越えるとまた春を迎える。

日本人として生まれて本当に良かったと思うことは、食べ物が美味しいということだ。特に主食である「米」は実にうまい。「コメ」を生産する国は日本だけではないが、欧米等では、価格は高くてもおいしい日本米を求める人や飲食店も少なくないなど、日本の米が世界基準でおいしいというのは紛れもない事実であろう。

「米」という字を分解すると「八十八」となることから、それだけ多くの手間ひまをかけてつくられると言われる日本の「米」。誇り高き存在だ。

さて、下記は、昨年令和4年11月29日の新潟日報の読者投稿欄「きらきらキラリ」に掲載された当校の1年生の作文だ。

僕の好きな食べ物は、ご飯です。最近、わが家で新米が出ました。やつぱり新米は、みずみずしく、もちもちして、とてもおいしいなと実感しました。

わが家では、いろいろな料理と一緒にご飯を食べます。特に肉と食べるご飯は最高で、大好きです。

サッカーの練習や試合で疲れている時も、ご飯を食べれば元気になります。試合で負けた時は、次はがんばろうという気持ちになります。

僕は、新米も好きですが古米も好きです。みずみずしさはあまりないですが、甘みがあり、とてもおいしいです。そして、古米ならではの、ぱさつきも好きです。

このように僕は、新潟のコメが大好きです。秋になり新米が始め、実りの秋だと思いました。これからもコメに感謝し、おいしく味わいたいと思います。

そして、新潟のコメの魅力をみんなにもっと知ってもらいたいと思いました。

僕は、これからもご飯をたくさん食べて、成長していきたいです。

そして、この内容を読んだ南魚沼市の71歳の農家の方が、その1週間後に、同じ投稿欄に、次の内容を寄せてくれた。

「きらきらキラリ」の投稿に、毎日のように感心させられます。先日の中学生の「新潟産は古米もおいしい」はうれしかったです。「古米ならではの、ぱさつきも好きです」と記され、よく味わっているなーと感心しました。

毎年、新米ができる親族に送っていませんが、横浜に住む妹は「古米でもうまいから古米でいいよ」と言います。実家ではまだ古米を食べているから遠慮していると感じていましたが、案外、本心なのかとも思いました。

田んぼも畑も一段落して雪囲いも終わったので、昔のままになっている作業所の2階を片づけました。そしたら、古い肥料袋や縄の他、あぜ用のシートがありました。今は機械でやるため必要ありませんが昔の父の苦労を思うと、涙が出てきました。捨てるのが申し訳なく思いましたが、処理施設に運びました。

未来を担う子どもたちのために、これからも「おいしいコメ」を作っていきたいと思えます。

全く見知らぬ新潟市の中学生と遠く離れた農家のおじさんが、「米」をきっかけに呼応した。何と微笑ましく爽やかなことかと大いに嬉しくなった。

さて、学校教育では、学力向上や心の教育がクローズアップされがち、つまりこれまでも今も、「知」「徳」「体」は並列というより優先順のように思われがちだが、学力や心を支えるものは、何はさておいても「健康」であろう。そして、その健康の源の二本柱は、「食」と「睡眠」だと考える。

だからこそ、当校の教育ビジョンでも、たくましく生きるための健康管理と体力向上を学校の使命の一つに掲げ、そのために「自分をコントロール」する力を、育成する資質・能力の大きな柱に位置付けている。健康・安全のための生活をコントロールできること、そしてそのために自分の意志や感情もコントロールできる。そんな人間に成長してほしい。

ある人から聞いた話では、「味覚」と「味」は異なるという。「味覚」が生理学的な観点による食べた感覚・感触で『おいしい』に対し、「味」は心理学的なもので、おいしいと思って食べるからこそ『おいしい』と感じるということらしい。つまり、ご飯や料理を作ってくれた人の気持ちや愛情、食料や食材を作ったり育てたり獲ったりする人の苦労や工夫を想う想像力が働いてこそ、本当に『おいしい』という「味」になるのだ。

私の尊敬すべきある友人に、小学校の時に母親がつくってくれたお弁当がある日『おいしくない』と何気なく言ったら、それ以降二度と母親がお弁当をつくってくれなかった、というエピソードの持ち主がいる。決して薄情な仕打ちとは思わない。逆に、そのお母さんの妥協なき決意に、教育に関する断固たるポリシーに裏打ちされた、我が子への深い愛情が垣間見える。

私が教員をしていて唯一自慢できることがあるとすれば、学校給食を『おいしくない』と思ったことが一度もないということだ。そして、妻がつくるお弁当も、まだ「愛」が込められていると信じて美味しくいただいている。